

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 24, No. 2 神奈川県立生命の星・地球博物館 Jun. 2018



マゲソクワガタ

Nicaqus japonicus Nagel, 1928

体長: 約7 mm

神奈川県相模原市緑区

かるべ はるき
苅部 治紀 (学芸員)

変わった名前のクワガタで、ほとんどの方はその存在を知らないと思います。パッと見た感じは小さな茶色いコガネムシで、クワガタの象徴ともいえるオスのツノ（大あご）も見あらず、とてもその仲間には見えません。生息環境や出現時期がなかなか判明せず、長い間‘幻の虫’でしたが、1990年代に生態が解明されました。山間の河原の砂地に埋没した流木が発生源で、5月頃に出現すること、無風晴天の気温の高い日中に河原の砂地を低く飛び回ること、などがわ

かってから、探索が進みました。幼虫の形態も解明され、成虫の外見からコブスジコガネ科に位置づけられるなど、^{うよよくせつ}紆余曲折があった分類的な位置づけも決着がつき、本種がクワガタムシの仲間であると結論されました。このことは近年の遺伝子解析からも支持されています。

神奈川県内では、比較的最近になって県北部の河川敷で記録されました。実際に飛んでいる姿は、一見ハエのようで、やはりクワガタっぽくないクワガタですね。

『神奈川県植物誌2018』～40年間の植物誌調査の成果～

たなか のりひさ
田中 徳久(学芸員)

これまでもあちこちで宣伝していますが、神奈川県はその植物相（ある地域に生えている植物の一覧）がよく把握されている都道府県の1つです。1933年に刊行された『神奈川県植物目録』（以下、『神植目33』と略記）、1958年に刊行された『神奈川県植物誌』（以下、『神植誌58』と略記）、1988年刊行の『神奈川県植物誌1988』（以下、『神植誌88』と略記）、2001年刊行の『神奈川県植物誌2001』（以下、『神植誌01』と略記）など、5冊の県単位の地域植物誌・植物目録が刊行されています。そして現在、6冊目となる『神奈川県植物誌2018』（以下、『神植誌18』と略記）が刊行準備中です（本誌が皆さんのお手元に届くころには、PDFが公開され、冊子体も印刷に入っていると良いのですが…）。ここでは『神植誌18』のための調査で得られた成果について、“仮”の紹介にはなりますが、『神植誌18』の公開・刊行に先立ち、いち早くお知らせします。

新「神奈川県植物誌」の調査とその特徴

『神植誌88』、『神植誌01』、『神植誌18』の3冊の植物誌は、市民による標本の採集に基づいた植物相調査が実施されたこと、その際に採集された標本に基づいた分布図が掲載されていること、図鑑として

使用できるように検索表や植物図を備えていることなどの特徴を有します（以下、これらの植物誌を新「神奈川県植物誌」と表記）。その植物相調査は、市町村区を基本とした調査区（『神植誌88』では108個、『神植誌01』、『神植誌18』では行政区界の変更で111個）を設け、各調査区に生育する植物について最低1点の標本を採集することを基本に進めてきました。『神植誌01』は、その計画当初、『神植誌88』の補充調査として位置づけ（地域によっては全種の採集を目標とした）ましたが、『神植誌18』では、『神植誌88』の調査以来、再度の各調査区全植物の採集を目指しました。この調査は、『神植誌88』の刊行を目指して結成された神奈川県植物誌調査会会員の無償の活動（植物の採集、標本作成、標本整理）と、関係機関の協力により約40年間続いてきた息の長い調査です。

集められた標本と構築されたデータベース

3回の新「神奈川県植物誌」のために採集された標本のデータベースには、約50万点の標本が登録されています。標本の所蔵館、調査への協力館は、『神植誌88』では、神奈川県立博物館（当生命の星・地球博物館の前身）、平塚市博

物館、横須賀市自然・人文博物館の3館でしたが、『神植誌01』では、愛川町郷土資料館、厚木市郷土資料館、川崎市青少年科学館（現呼称は「かわさき宙と緑の科学館」）、相模原市立博物館、横浜市こども植物園が加わり、『神植誌18』では、大磯町郷土資料館、茅ヶ崎市郷土資料館、日本大学生物資源科学部博物館、藤沢市教育文化センターにも協力していただきました。また、登録された標本の中には、新「神奈川県植物誌」のために集められたものだけでなく、各標本庫で収蔵されていたさまざまな標本を含み、それらは各協力館の尽力と一部は神奈川県植物誌調査会の協力でデータベース化されてきました。データベース化された時期別に採集年ごとの採集標本数を図1に示しました。新「神奈川県植物誌」の調査の過程で、過去の他の標本のデータベース化も進められてきたことが読み取れます。

神奈川県で記録された植物の種類数

『神植目33』、『神植誌58』、『神植誌88』、『神植誌01』、『神植誌18』で記録された植物の種類数の推移を在来植物と帰化植物に分けて図2に示しました（『神植誌18』の数は仮の数字）。『神植誌88』までは、植物誌の刊行ごとに、在来植物も

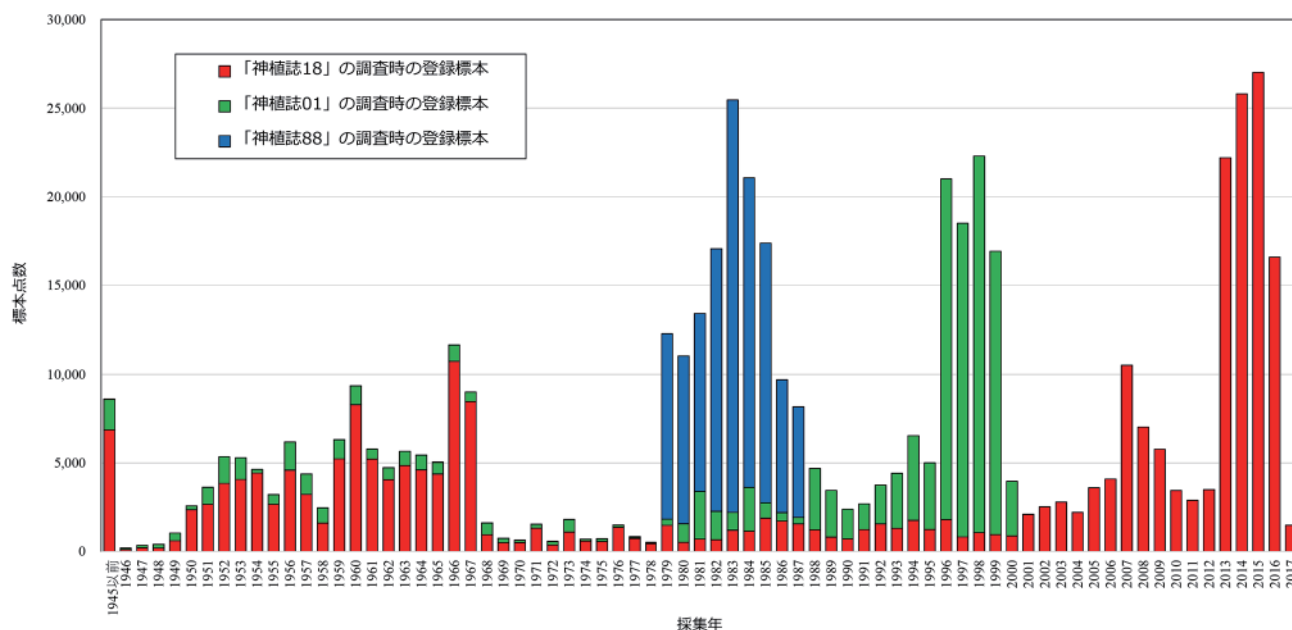


図1. 標本の採集年ごとのデータベースに登録された調査時期（第17回 日本植物分類学会ポスター発表より）。

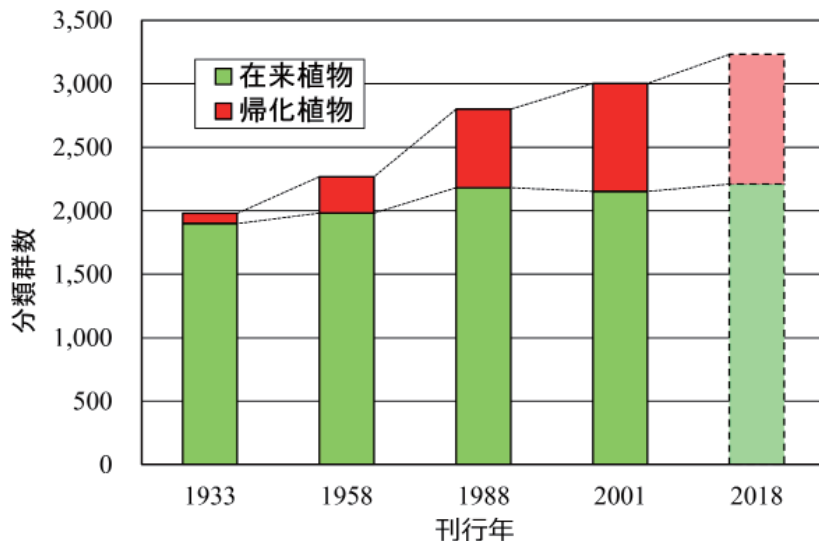


図2. 記録された植物の種類数の推移。『神植誌01』以前の数は田中（2016 自然科学のとびら 22: 12-13）による。

帰化植物も記録された植物数は増大しています。ですが、在来植物では、1988年と2001年では増加せず、『神植誌88』の調査で県内の植物相はほぼ調べつくされている、と思われて来ましたが、しかし、『神植誌18』の調査では記録数が増加しています。分類学的研究の成果による増分も含まれているかもしれませんが、ジンジソウ（深町 2017 Flora Kanagawa (83): 991-992；図3）やイワヤシダ（岡 2016 Flora Kanagawa (81):970）など、神奈川県で記録されていなかった在来植物が新たに記録されたことは驚きです。これらの植物は、これまでの調査で見つからなかったものが発見されたのか、植物自身



図3. ジンジソウ（足柄上郡山北町 2016年10月10日 勝山輝男撮影）。

が分布を広げて来たものなのか、興味深いところ。一方、帰化植物は、相変わらず増大し続けており、新しい帰化植物が侵入し続けていると思われます。

分布を拡大した植物たち

『神植誌01』の刊行後、本誌（第7巻 第2号）で『『神奈川植物誌2001』の分布図から分かること』と題して、分布を拡大した植物として、帰化植物ではウラジロチコグサとメリケンガヤツリ、在来植物としてタシロランの分布図を紹介しています。ここでも、同じ植物の分布図を図4～6に示しました。それぞれ『神植誌01』刊行後も、着実！？に分布を拡大していることが分布図から読み取れます。特に、タシロランの内陸部での記録は増加しており、その要因については、今後検討してみたい課題です。

新「神奈川植物誌」の成果

新「神奈川植物誌」の成果の第一は、ここで記したような植物相に関する知見の増大ですが、調査に参加したことで常に身近な植物相を見つめる目を持つ多くの市民が育っています。また、集められた標本が県内各地の協力館の標本庫に収蔵され、地域の自然の証拠として活用可能であり、市民が集まり活動する場を提供していることも大きな成果です（勝山 2001 遺伝 55(4): 36-41）。ただし近年ではいくつかの課題もあります。集め続けて来た標本が膨大になり、各館で標本庫の

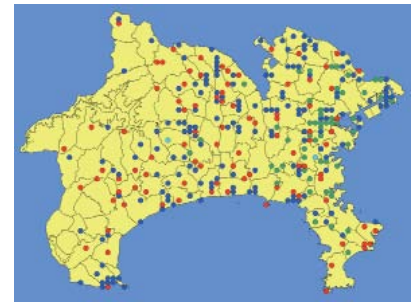


図4. ウラジロチコグサの分布図。『神植誌18』に掲載予定の分布図をカラー化したもの。

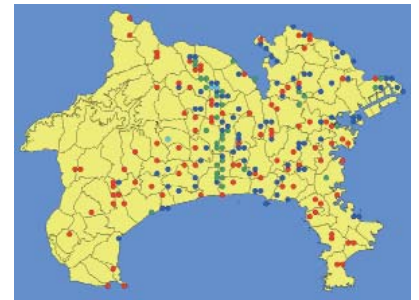


図5. メリケンガヤツリの分布図。

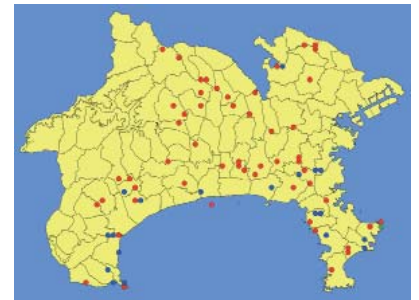
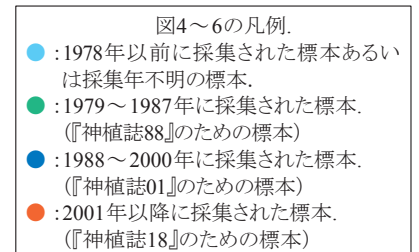


図6. タシロランの分布図。



スペースを圧迫しつつあります。また、全国各地の自然愛好団体同様、神奈川県植物誌調査会会員の高齢化は否めません。標本の増加や会員の高齢化への対策・対応は、今後も地域の植物相を把握し続けることが重要な使命である博物館が直面している重要な課題であると言えます。

なお、ここで示した成果とともに、地域植物誌をつくる意義とその手法、今後の展望について、7月14日から開催される特別展「植物誌をつくろう！」でさらに詳細に紹介しますので、ぜひご覧下さい（本誌16 ページ参照）。

小さな化石の大きな発見 ～東アジア初の両生類アルバノペトン科の報告～

まつもと りょうこ
松本 涼子(学芸員)



図1. 石川県白山市桑島に露出する、桑島化石壁。

はじめに

石川県白山市桑島には「桑島化石壁」と呼ばれる恐竜のいた白亜紀前期（約1億3000万年前）の地層である桑島層が露出しており、日本最古の珪化木産地として国の天然記念物に指定されています（図1）。1997年、この崖を貫通する「ライントネル」が掘削されました。その際、トンネルから搬出された桑島層の岩石をコツコツと割る発掘作業が当時から現在まで続けられています。この調査によって、これまでに多くの新種の化石が発見され、恐竜時代の東アジアの生物の多様性を知る上で重要な化石産地として国際的にも注目を浴びています。今回、アジアでも非常に珍しい両生類であるアルバノペトン科の新種をロンドン大学との共同研究によって発表したのをご紹介します。

アルバノペトン科とは？

現生の両生類は、カエル（無尾類）、サンショウウオ・イモリ（有尾類）、アシナシイモリ（無足類）の3グループが知られています。ところが、初期の両生類から現生両生類へと至る進化の道筋については、現在も議論が続いています。アルバノペトン科は、現生の両生類に近い絶滅種であると考えられており、初期の両生類と現在の両生類を繋ぐカギとなる重要な分類群なのです。

アルバノペトン科は、ジュラ紀中期（1億6500万年前）から鮮新世（300万年前）まで生息していたことが知られています。その外形はサンショウウオに似ており、身体を鱗で覆われた陸生の両生類です。特徴としては、頭骨頭頂部の彫刻や、複雑な左右の下顎の関節などが挙げられます。全長が10 cmにも満たない小さな動物であるため、化石記録も限られています。これまでに4属のアルバノペトン科がヨーロッパ、北米、北アフリカなどから報告されていますが、アジアからの記録は少なく、白亜紀後期のウズベキスタンに限られます。北米では白亜紀中頃（約1億1200万年前）から産出しているため、アルバノペトン科はベーリング海峡を渡り、北米からアジアに白亜紀後期に分布を拡大したと考えられてきました。しかし、桑島化石壁からの発見により、この仮説は覆ることになるのです。

小さな化石の発見

2012年、夏の集中調査で桑島を訪れた際、表面に奇妙な模様がある小さな骨（約0.4 cm）が、長さ2 cm・厚さ0.5 cmにも満たない小さな岩石片に埋まっているのが目に留まりました（図2a）。いつ、誰が見つけたのか、記録はなく、技術者によって^{ぼうしゅつ}剖出作業が一部行なわれ、未同定標本として保管されていました。小さな縫い針の先端

を研いだもので、岩石を少しずつ取り除いたところ、さらに多くの骨が重なり合うように密集しており、アルバノペトン科に特徴的な、頭頂部分の骨も見つかりました。しかし、あまりに繊細な化石であるため、母岩をそれ以上掘り進める事が出来ません。そこでμCTスキャナを使ったところ、岩石の中に骨がたくさん埋まっているのが確認できました。岩石に埋まっている個々の骨の形を抜き出すのは、容易な作業ではありません。専用のソフト（AVIZO）を使って1200枚近くのCTスライス画像を一枚ずつ見ながら各骨を抽出し、繋ぎ合わせるという作業に1年半近く費やしました。そうして、得られた画像が図2bです。頭骨、足の骨、背骨など1個体分の骨が43個纏まって保存されていました。左右一方しか保存されていない部位は、デジタルデータを左右反転させて復元し、大部分の頭骨部位を揃えることが出来ました。これを3Dプリンターで20倍に拡大・出力し、立体パズルを組み立て、頭骨の復元モデルが完成しました（図3）。これをもとに描かれた復元画が図4です。頭骨の各部位を既存種と比較した結果、新属新種であることが明らかになり、シラーペトン・イサジイと命名しました。

大きな発見

この発見には3つの大きな意義がありました。第1に、東アジア初のアルバノペトン科の報告であり、アジア最古の化石記録であることです。北米の化石記録（白亜紀中頃）よりも古い時代から東アジアにアルバノペトン科が生息していたことが示され、従来の北米からアジアへと分布を拡大したという説を覆すことになりました。では、彼らはどこから来たのでしょうか？逆にアジアから北米に渡ったのかもしれないし、より古い化石記録のあるヨーロッパからアジア・北米へとそれぞれに分布を広げたのかもしれませんが。これらの仮説の検証にはもっと多くの化石記録が必要になるでしょう。第2に、頭骨の様々な部分が立体的に保存されていたことで、頭骨の解剖学的特徴が明らかになりました。これまでアルバノペトン科にはないと思わ

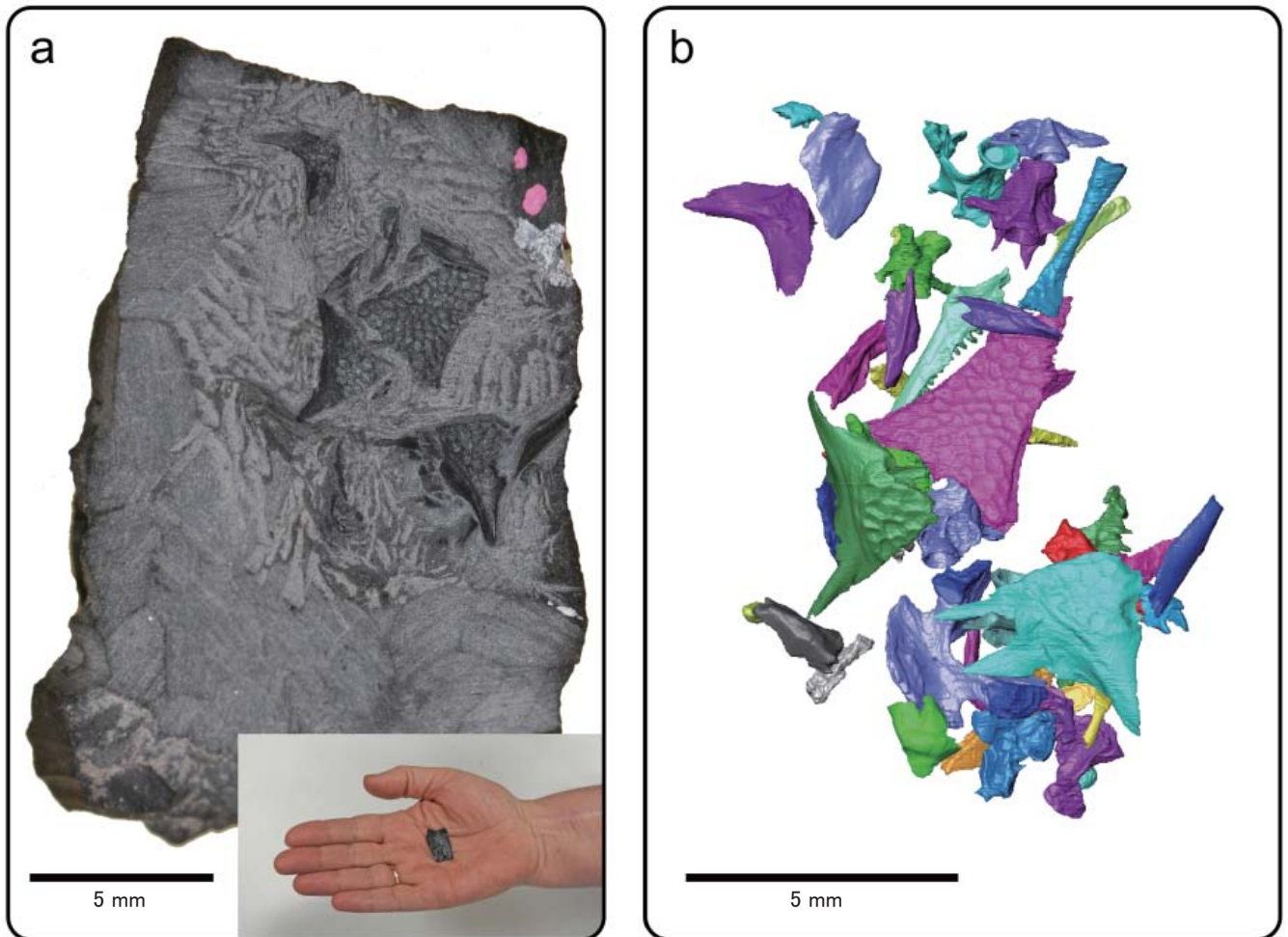


図2. 桑島化石壁から産出した新種のアルバノペトン科, シラーペトン・イサジイ (ホロタイプSBEI 2459). a: 標本写真, b: CT 画像を立体構築したもの.

れていた後頭部付近の骨が確認されたことで、アルバノペトン科がより原始的な両生類であることが示されました。第3に、桑島化石壁における化石探索精度の高さを世界に示したことです。CTなどのテクノロジーが発達しても、最初に化石を見つけるのは人の目です。さらに、どんな小さな骨片もその発見の重要性を信じて剖出作業を行ってきた技術者がいなか

れば、この化石は岩石に埋まって眠り続けたことでしょう。今回の小さな化石の大きな発見は、多くの方々の地道な努力に支えられ、続けられてきた桑島化石壁の調査を象徴する成果であったと感じています。

謝辞

本研究において協力して頂いた皆さんに感謝申し上げます。

河野礼子氏 (慶應義塾大学)、山口一男氏・みき子氏 (白山市)、脇本晃美氏 (福井県)、大倉正敏氏 (愛知県)、山本匠氏 (イラストレーター)、伊左治鎮司氏 (千葉県立中央博物館)、白山市教育委員会、桑島化石調査団、都立産業技術研究センター、名古屋市工業研究所。

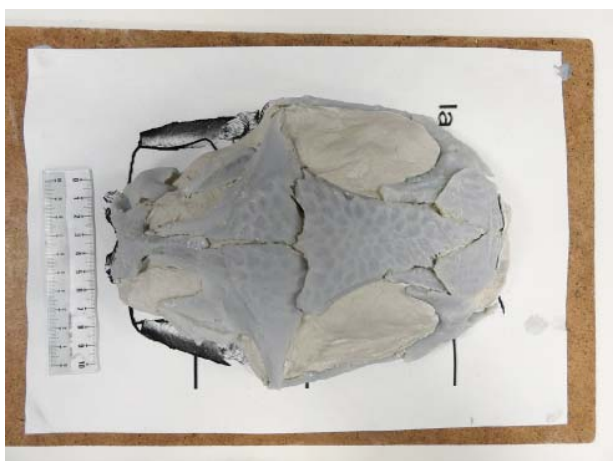


図3. 3Dプリンターで20倍に拡大・出力し、復元した頭骨。



図4. 山本匠氏によるシラーペトン・イサジイ復元画。

ドイツ南部とウィーンの自然史博物館を訪ねて

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)

今年(2018年)1月に全国科学系博物館協議会が企画した海外視察研修に参加し、ドイツ南部とウィーンの博物館を訪れました。全部で11館1園を訪れましたが紙面の都合で、ドイツの2館とオーストリアの1館について報告します。



図1. ゼンケンベルク自然史博物館のファサード。写真より右は増改築の工事区域になるので、ディプロドクスが赤いヘルメットをかぶっている。

ゼンケンベルク研究所・自然史博物館
Senckenberg Forschungsinstitut und Naturmuseum (図1)

フランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main マイン川沿いのフランクフルト。もう一つのFrankfurt an der Oderと区別される)にある世界的に有名な博物館です。私は学生のときに訪れて以来、約30年ぶりの訪問でした。見覚えのある展示もありますが、およそ2/3くらいが新しくなっていたという印象です。

1817年にゼンケンベルクと32人の市民によって設立されたゼンケンベルク自然研究協会 Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft によって運営されています。2017年に創立200周年を迎えた同協会は、フランクフルトの博物館と研究所の他に2つの博物館(ドレスデンとゲルリッツ)と3つの研究所(海洋研究所、生物多様性および気象研究

所、昆虫研究所)からなり、収蔵標本は約4,000万点(当館の50~60倍!)とのことです。スタッフは約800人で、ボランティアは受け入れていないそうです。

こぢんまりした外観の博物館へ入り、エントランスホールを抜けると、恐竜ホールへと続きます。ホールにはイグアノドン、ディプロドクス、ティラノサウルスなどの恐竜とケツアルコアトルスがゆったりと配置されています(図2)。隣は海生爬虫類化石の展示室でホルツマーデン Holzmaden 産の魚竜やイギリス産の首長竜、アメリカ産モササウルスなどがあります。ドイツならではの展示として、1995年に UNESCO 世界自然遺産に登録されたグリュベ・メッセル Grube Messel 産の非常に保存の良い化石だけで構成された展示室があります(当館JB展示室にも少し標本があります)。また、企画展示室ヴォルフガング・シュトイビング・ホール Wolfgang-Steubing-Saal の生物多様性展示は、とても美しいだけでなく、タッチパネルや望遠鏡型の解説装置まであって、わかりやすくする工夫が凝らされた展示でした。他にもルーシーなど人類化石や植物化石、膨大な鳥類剥製の展示など、大変に充実しています。その上、さらなる



図3. 博物館最寄りのポッケンハイマー・ヴァーデル駅。電車が地下鉄になる(ウツ。入口です)。



図2. 恐竜ホール。手前からイグアノドン、ディプロドクス(全身と頭骨)、ティラノサウルス(見えにくい)、トリケラトプス(頭骨2個と下半身が見える)、上空にケツアルコアトルス、左手前の物部はステゴサウルス。中央の大きな本(↑)は200周年記念誌。

充実を目指して、これまで研究所や収蔵庫として使ってきた建物を展示室にしたり、敷地内に直径25mのプラネタリウムを含む新しい建物を建設したりという、増改築工事が行われていました。直接関係ないのですが、最寄り駅の入口では、車両が地面にめり込んでいました(図3)。



図4. 中州に建つ長大なドイツ博物館。



図5. 約400mの坑道展示。

ドイツ博物館
Deutsches Museum (図4)

ミュンヘンMünchen 旧市街の東を流れるイーザル川 Isar の中州に建っています。湿気や洪水を心配してたずねたら、浸水したこともあったそうです。浸水対策も含めて2008年から建物の改修および展示更新工事が始まり、100周年を迎える2025年に完成予定だそうです。改修が終わると、閉鎖中の25,000m²の展示室が加わり、51,500m²(当館の10倍以上!)になるのだとか。

同館はオスカー・フォン・ミラー博士 Oskar von Miller が1903年に設立した財団からはじまり、今の場所に1925年に移転しました。先進的な展示を行い、1928年に開館したシカゴ科学・産業博物館の手本にもされたとのこと。その後、第二次世界大戦により大きな被害を受けましたが再建し、航空博物館、交通博物館などの分館を持つに至りました。2020年には新しい分館がニュルンベルクに開館予定だそうです。研究部門は自然科学、人類と環境、交通、材料とエネルギー、コミュニ

ケーションと情報の6分野からなり、展示は50項目あって広い分野をカバーしています（工事中は36項目）。

入館するには（中州なので）橋を渡って、渡り廊下をくぐり中庭に出ます。右手に博物館の入口があり、左手に大きな附属図書館 Bibliothek des Deutschen Museums があります。その図書館（蔵書が100万冊！）の会議室でレクチャーを受けてから、中庭を抜けて博物館に入館しました。

海王星を発見した望遠鏡、核分裂を発見した実験装置、レントゲン博士のレントゲン装置、ライト兄弟の飛行機などたくさんの実物（！）が展示されており、他にもUボートの輪切り、飛行機、帆船、製鋼の機械、エンジンの鋳型などがあります。それらの中で、特にすばらしいと感じたのは鉱業の展示です。館内に暗い坑道があり、その中を上ったり下ったり曲がったりして巡りながら探検気分で見学します（図5）。16世紀から現代までの石炭や岩塩などさまざまな採鉱の様子を再現したジオラマや模型、実物の機械などが展示されていました。狭くて暗くて曲がっていて、階段や坂もあるので、長さがわからなかったのですが約400mだそうです。バリアフリー化は困難でしょうが、とても良くできた体験型展示だと思います。



図6. 宮殿のようなウィーン自然史博物館。

ウィーン自然史博物館

Naturhistorisches Museum Wien（図6）

恥ずかしながらウィーンに行くことになるまで、まったく知らなかった博物館ですが、近づくとその宮殿のような建物に圧倒されました。広さはともかく、立派さではルーブルに勝るとも劣らないと思ったくらいです。とにかく立派！

フィレンツェに行くところでもメディチ家が登場するように、ウィーンではハプスブルク家のマリア・テレジア、その夫のフランツ I 世 Franz I.、フランツ・ヨーゼフ I 世 Franz Joseph I. がやたらと登場するのです

が、同館はそのフランツ・ヨーゼフ I 世がつくった博物館です。ウェブサイト <http://www.nhm-wien.ac.at/en> によれば同館のコレクションはフランツ I 世が1750年にフィレンツェの科学者バイユウ Jean de Baillou から当時世界で最も有名だったバイユウ・コレクション（30,000点に及ぶ化石や貝類、サンゴ類、岩石、鉱物等からなる）を購入したことに始まります。そして、約140年後フランツ・ヨーゼフ I 世によって美術史博物館と向かい合うこの建物が建設され、1889年に公開されました。

現在は約60人の研究者がおり、大学以外では国内最大の自然史研究センターでもあるそうです。オーストリアの人口（約875万人 2016年）は神奈川県より少ないのですが、自然史博物館の充実度は当館とは比較になりません。

展示室はやはり宮殿のようで、一つひとつが広く、天井は非常に高く、壁の上部や一部の天井には展示テーマに関連した壁画・天井画が描かれています（図7）。39もの常設展示室があり、1階は岩石・鉱物、隕石、化石、恐竜、人類ほか、2階が微生物、軟体動物、甲殻類、昆虫、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類となっていました。展示室によっては展示ケースの上にたくさんの剥製や模型が展示され、天井が高いことを利用して立体的な展示がデザインされています。歴史を感じさせる古いタイプの展示（その中には単に昔のままのものと、最近つくられたものがある）と、タッチパネルやVRを利用した新しいタイプの展示が混在しています。どちらもそれぞれに魅力的な展示



図7. 古生物の展示室。古いタイプの展示。

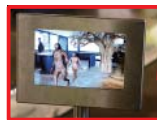
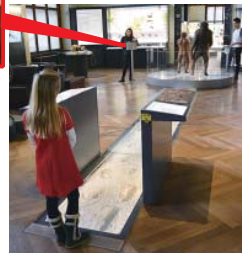


図8. ラエトリの足跡とアウストラロピテクス・アファレンシスの模型とVRを組み合わせた展示。



ですが、古いタイプの展示にはたくさんの標本が並べられ、1日で全部を見るのはかなり大変です。そのことは博物館側も理解しているようで、「NHM TOP 100」（自然史博物館100選）という表示があり、時間がない見学者の役に立っています。ただし、その資料がなぜTOP100に選ばれているのかに関する説明やコメントは（たぶん）ありませんでした。

人類学展示室では、1978年に発見されたラエトリの足跡化石レプリカの先に、アウストラロピテクス・アファレンシスの復元模型が置かれています。その足跡の上を歩いて行くと、小さなモニターにはアウストラロピテクス・アファレンシスが歩いてくる様子が映し出されます。1人では体験できないのが残念ですが、足跡化石の意味、古人類の復元、その動きと見学者の重ね合わせが、とても良いインプット展示を作り上げていると思いました（図8）。

同館の中央にそびえるドームの下は、たぶん世界一豪華な内装のミュージアム・カフェになっています（図9）。本場のウィнна・コーヒーを楽しむ時間がなかったのが心残りです。

「百聞は一見にしかず」と申します。海外の空気に触れ、さまざまな博物館・美術館・動物園などを見て歩き、調べて比較する機会を得ることは、当館や日本の博物館を考える良い機会となり、他に替え難い体験だと感じています。

最後に海外視察研修を主催した全国科学系博物館協議会、旅費の補助をいただいた全国科学博物館振興財団、カメイ社会教育振興財団に御礼申し上げます。

JSPS 科研費課題番号20605018「博物館体験の向上をめざす展示解説手法の研究」（研



図9. ドームの下に豪華なミュージアム・カフェ。

究代表者 大島光春）を使用しました。本記事中の日本語の館名称・団体名などは、著者による和訳です。

催し物のご案内

特別展

植物誌をつくろう！

～『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから～

2018年7月14日Sat. → 11月4日Sun.

開館時間▷9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日▷9月3日(月)・10日(月)・11日(火)・18日(火)・
25日(火)・10月1日(月)・9日(火)・10日(水)・
15日(月)・22日(月)・29日(月)

観覧料▷高校生以上:有料、中学生以下:無料



神奈川県は、1979年から続く市民グループ、「神奈川県植物誌調査会」の活動によって、全国で最も植物相が解明されている地域です。神奈川県の植物相の今、そして地域の植物をどうやって調べ、記録してきたのか、博物館を拠点とした地域植物誌の意義と展望とともに紹介します。

催し物の詳細についてはウェブサイトをご覧ください。
問合せ先:企画情報部 企画普及課

生命の星



ライブラリー通信

文人たちの博物誌③ 上村 淳之の巻

うえむら あつし

つちや さだお

土屋 定夫 (司書)

上村 淳之氏は美人画で知られた松園を祖母に、花鳥画を得意とした松篁を父に持つ日本画家です。父の松篁は鳥の写生に強いこだわりを持ち、奈良市郊外にあるアトリエの敷地に広大な鳥の飼育施設を作りました。松篁亡き後の管理は淳之氏に引き継がれ、鳥の種類を増やしていくのですが、その時々々の苦労話やちょっとユーモラスなエピソードなどを記したのが、今回ご紹介する『鳥たちに魅せられて』です。

前半部分を「鳥を飼う」、後半を「花鳥画を描く」と分けられていますが、鳥を育てる情熱が全編にあふれ、その生態についても驚くほどの知識が披露されています。巻末には「飼育野生鳥類リスト」が付され、200種を超える鳥名が記載されています。出版の時点で1,500羽余を飼育していたそうです。

これらの努力も評価されたのでしょうか、この敷地は現在、日本鳥類保護連盟より研究所の指定を受け、淳之氏が所長を務め、研究が続けられています。

本書には淳之氏の花鳥画も随所に挟み込まれており、画集としても楽しむことができます。そこに登場する鳥たちは写実的というよりは、なぜか、のどかで優しさを感じられるのですが、その理由は次の淳之氏の一文が教えてくれるでしょう。

対象の鳥と本当に心をかよわせ、その生態をよく知り、その生きざまを見ながら、思いをその鳥に託して描くために、身边にいつも鳥たちが居てくれ、常に会話ができて、一緒に悲しみ、苦しみ、喜んで生活して初めて、「私の花鳥画」というものが出来るのではないかと思っている。



中央公論美術出版 1997年

【当日受付の講座】

- 「夏休み昆虫ひろば①」[博物館]
8月4日(土) ①10:00～12:00 ②13:00～15:00
 - 「夏休み昆虫ひろば②」[博物館]
8月25日(土) ①10:00～12:00 ②13:00～15:00
- 対象/幼児～成人 人数制限なし
申込締切/なし

【事前申し込みの講座】

- 「貝殻のふしぎを調べよう」[博物館]
①ホタテ②アワビ③いろいろな巻貝
①7月21日(土)②7月28日(土)③8月4日(土) 各10:00～15:30
対象/小学4年生～成人 各12人
申込締切/①7月3日(火)②7月10日(火)③7月17日(火)
- 「きのこさがし」[博物館および博物館周辺]
7月27日(金) 10:00～15:00
対象/小学1年生～中学生 20人
※小学1～3年生は保護者参加必須
申込締切/7月10日(火)
- 「岩石プレパラートの作製と観察講座」
[博物館および博物館周辺の河原]
8月25日(土) 9:30～15:30
対象/中学生～成人 12人
申込締切/8月7日(火)
- 「海辺の野鳥観察会」[大磯町(黒崎海岸)]
9月8日(土) 8:00～10:00
対象/小学1年生～中学生 20人
※小中学生とも保護者参加必須
申込締切/8月21日(火)
- 「植物分類講座『ヒユとアカザ』」[博物館]
9月9日(日) 13:30～15:30
対象/高校生～成人 24人
申込締切/8月21日(火)
- 「外来種『ムネアカハラビロカマキリ』調査!」[博物館]
9月9日(日)・11月18日(日)の2日間 13:30～15:00
対象/小学1年生～成人 50人
申込締切/8月21日(火)
- 「本当は怖いアメリカザリガニ」[川崎市(麻布区はるひ野)]
9月15日(土) 9:30～15:30
対象/小学1年生～成人 20人
※小学生は保護者参加必須
申込締切/8月28日(火)
- 「川と用水路の生き物を調べよう」[開成町(吉田島周辺)]
9月29日(土) 10:00～14:00
対象/小学1年生～成人 25人
※小学生は保護者参加必須
申込締切/9月11日(火)
- 「植物図鑑の使い方(樹木編)～この木なんの樹?～」[博物館]
10月6日(土) 10:00～15:00
対象/小学4年生～成人 30人
申込締切/9月18日(火)
- 「きのこの観察と同定」[博物館および博物館周辺]
10月7日(日) 10:00～15:30
対象/中学生～成人 20人
申込締切/9月18日(火)

自然科学のつば

第24巻2号 (通巻91号)

2018年6月20日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館

館長 平田大二

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/>

編集 本杉 弥生

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2018 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.

*冊子体には再生紙を使用しています。